



富大考古通信

第14号

毎年春と秋に学生と一緒にやってきた富山県南砺市での分布調査も2013年で8年目に突入し、予定では今年度で最終年度をむかえる。思えば、果てしない田園地帯を畦畔や川筋に沿って歩き、また時には熊におびえながら山裾を巡り歩き、季節外れのみぞれにうたれ、花粉症もこらえながら、皆で積み上げた道のりだった。

広大な範囲ゆえ、土器や陶磁器がよく拾える所とそうではない場所があるようだ。分布調査は数班に分かれて行動するが、不運にも後者のような地区の担当にあたった時には、一日中歩いても何にも拾えない。そんな時には、疲労と虚脱感が一挙に襲ってくる。一方で、はじめて拾う土器・陶磁器や散乱する遺物を目の当たりにして興奮冷めやらぬ者がいる。次回も「一攫千金」を願う者、また次に期待をかける者、はたまたたくさんの遺物を拾いすぎて報告書整理を杞憂する者など、毎年幾つもの人間ドラマが繰り返される。

分布調査において近世磁器と並んで毎回お馴染みなのが、中世の能登で生産された灰色硬質の珠洲焼である。珠洲焼の破片を拾うたびに、中世にあって、その販路の広さや生活への浸透を思わずにはいられない。反対に、弥生・古墳時代の土器や旧石器などは、ほとんど目にすることがなく、いつも不思議に思う。遺物としての残りのよさや見つけやすさに関わるのであろうか、あるいは認識のしやすさによるものならば、調査する側に問題があり、大いに勉強を積まなければならない。

土器や陶磁器、石器が拾えなかったからと言って、その場所に遺跡が埋蔵されていないとは限らない。地表に露出していた遺物がすでに拾われて（取り除かれて）しまったケースや遺跡が完全に破壊されてしまったケースが考えられるからである。また、遺跡が地中に完全にパックされている場合、遺物が地表面にあらわれることはない。逆に、遺物を見つけたからと言って、そこに遺跡が埋蔵されているとは必ずしも言えない。動植物や川など自然のはたらきで、また盛土などの人為的行為によって、別の場所から移動するケースが見られるからである。さらにまた、地表面に遺物があらわれるということは耕作等や自然作用によって遺跡が乱されているということであり、遺跡保存の観点からは、遺物を見つけたからと言って手放しに喜ぶことはできない。

こんなことを復唱しながら歩き回り、遺物を拾った、拾えなかった地区の歴史に思いをはせる。同時に周辺の地形を見渡し、採集遺物から推測される時代や性格の遺跡を、地形の上に重ね合わせる。例えば、川筋の高所から遺物が多数採集されたならば、そこに船着場と関係するような遺跡が埋もれているのではないかというように。また、山麓部への遺物散布は縄文時代が過ぎるといったん収束するが、中世の段階から再び見られはじめることや、逆に古代を中心とする段階には扇央部への進出が顕著なことなど、文献にはあらわれない1つの地域における長期間の土地の利用史にもますます興味がわいてくる。

分布調査は、第一義的には遺跡の新規発見や範囲確認、現況確認などを主な目的とする。その成果は、すなわち開発行為等に伴う埋蔵文化財の調査に深く関わるわけだから、直接ではないにしろ、現代生活とも決して無縁ではない。これに加え、地形を読み取り、そこに暮らした先人たちの生活や地域の歴史を紐解く分布調査は、「異文化理解」への一つのアプローチだと理解し、現代における意義について納得させながら、今年もひたすら歩く。

目次

分布調査へのいざない

高橋浩二

修士論文中間報告要旨

「飛騨の古代寺院における瓦製作技術の導入と展開 ―縦置き型一本作り軒丸瓦と竹状模骨瓦から―」

三好清超

卒業論文要旨

「縄文時代の貯蔵穴からみる食糧利用の一考察 ―北陸地域を対象に―」

大澤拓馬

「長野県上伊那郡箕輪町松島王墓古墳における一考察」

今井 翔

「江戸時代の大名墓所に関する一考察―時期・石高と規模の比較から―」

工藤 海

修論中間報告会・卒論発表会と追いコンのお知らせ
編集後記

修士論文中間報告要旨

飛驒の古代寺院における瓦製作技術の導入と展開

—縦置き型一本作り軒丸瓦と竹状模骨瓦から—

人文科学研究科 1 回生 三好 清超

旧飛驒国にあたる岐阜県北部の飛驒地方では、古代寺院の数が 16 か所に達する。修士論文では、これらの遺跡から出土した瓦の製作技術について検討し、他地域からの製作技術の導入と、旧飛驒国内における展開について考えたい。

飛驒の盆地は高山盆地と古川国府盆地に大きく二分される。奈良時代に創建された国分寺・国分尼寺は高山盆地に所在し、飛鳥時代の寺院としては、高山盆地に 3 カ寺、古川国府盆地に 11 カ寺が所在する。

飛驒の古代寺院間のつながりは、軒丸瓦の瓦当文様と製作技術の両面からの研究がある。まず、軒丸瓦の瓦当文様については、29 種に分類され、そのうち 6 種においては、同範及び同系の関係を持つことが論じられている。特に、三仏寺廃寺（高山盆地）が国分寺・国分尼寺へつながる瓦当文様をもつことが重要である。次に、製作技術については、寿楽寺廃寺（古川国府盆地）と三仏寺廃寺（高山盆地）の軒丸瓦に、縦置き型一本作り軒丸瓦製作技法で製作されたものがあることが判明している。縦置き型一本作り軒丸瓦製作技法とは、模骨を縦にした状態で、丸瓦部から瓦当部までを一連の工程で製作した技法である。近江南滋賀廃寺が初現とされる。

また、他地域と飛驒の古代寺院との関わりについては、寿楽寺廃寺で出土する忍冬六葉蓮華文軒丸瓦と単弁八葉蓮華文軒丸瓦の瓦当文様に関して論じられてきた。忍冬六葉蓮華文軒丸瓦については、河内野中寺跡と尾張元興寺で出土するものと同型異範であり、河内野中寺→尾張元興寺→飛驒寿楽寺の流れをつかむことができている。

次に、単弁八葉蓮華文軒丸瓦については、同系のものが近江衣川廃寺、飛驒寿楽寺、信濃明科廃寺、甲斐天狗沢窯で出土している。寿楽寺跡と明科廃寺跡のものは同範であり、明科廃寺跡が先行することが判明している。また、どちらも縦置き型一本作りで製作されている。しかし、瓦当文様の系統全体の伝播の方向については判然としない状況である。

一方、瓦製作技術だけでは他地域との関わりが論じられたことはなく、検討の余地がある。特に、寿楽寺廃寺跡から出土する竹状模骨瓦については、他地域と関わる要素を持ちながら、比較検討されたことはなかった。なお、竹状模骨瓦とは、細い側板圧痕が残る丸瓦・平瓦であり、竹のような丸く細い棒を連結して模骨としたものである。主に飛鳥と北九州で出土する。

このような先行研究を踏まえ、寿楽寺廃寺・三仏寺廃寺跡で出土した縦置き型一本作り軒丸瓦製作技法と、寿楽寺廃寺跡から出土した竹状模骨瓦に着目し、飛驒における瓦製作技術の導入と展開について検討を行いたい。

今回は修士論文中間報告として、①飛驒の古代寺院に関わる研究史と課題、②縦置き型一本作り軒丸瓦製作技法の研究史、③竹状模骨瓦の研究史、について発表を行う。

卒業論文要旨

縄文時代の貯蔵穴からみる食糧利用の一考察

—北陸地域を対象に—

大澤拓馬

本研究では北陸地域の貯蔵穴を対象に住居跡との位置関係から全国的な流れの中でどのように展開していくかを宮路敦子氏の論を参考に分類し、また貯蔵穴同士の比較から当時の食糧利用の方法や貯蔵行為に関する意識を明らかにすることを目的に行っていく。

研究方法としては貯蔵穴の検出場所や貯蔵物、形状などによる比較と住居跡との位置関係からの分類をおこなった。この分類は宮路氏の論を参考にさせて頂いた。

比較・分類の結果、北陸地域の大半の貯蔵穴は低湿地型貯蔵穴であることが分かった。また、造営位置からは貯蔵穴を一か所に設けることで管理を簡潔にし、効率よく出し入れをしようとする動きがみられる。また、貯蔵物から貯蔵対象は堅果類であり、貯蔵穴内に貯蔵物が残存していることから、貯蔵穴に対する依存度は決して高いものではなく、貯蔵穴を利用しなくても飢えることのない食糧利用形態が確立していたと思われる。

住居跡との位置関係からは北陸地域は縄文時代早期末から中期末までは貯蔵穴は住居内、あるいは住居に接近して設けられる場合が多く、中期中葉以降は住居から離れて、あるいは住居を伴わず関係が明らかにされない場合が多いという西日本と類似する傾向であるということが分かった。宮路氏は住居内や住居に接近している貯蔵穴は個人管理の傾向が強く、住居から離れている、あるいは住居との関係が不明瞭な貯蔵穴は集団管理の傾向が強いと主張していることから、貯蔵穴の管理形態は早期末から中期末では個人管理の傾向が強く、中期末以降は集団管理に移行していることがいえる。

宮路氏は西日本の変遷において特に早期や前期における位置関係は不明瞭である。しかし、北陸地域の変遷を見る限り、縄文時代を通して貯蔵穴と住居跡の位置関係つまり、管理形態を把握することができたことは本研究の成果ではないだろうか。また、北陸地域では中期中葉から中期末にかけては個人管理か集団管理かを明確に区別できないような遺跡もあり、個人管理から集団管理への過渡期であり、中期末という境をさかのぼる可能性がある。

伊那谷は長野県南部に位置し、5世紀以降に古墳の築造が急増し、前方後円墳する傾向をみせた地域である。まさに古墳時代後期の長野県の政治的中心地とも位置づけられる地域といえよう。伊那谷は更に飯田市を中心とした下伊那とそれよりは北に位置する上伊那とに大別されるが、上伊那における前方後円墳は松島王墓古墳のみである。

松島王墓古墳は全長約60mと比較的大きく、また当該地域においても豊富な埴輪が検出されたことで知られる。その一方で発掘調査が行われていないため、本墳の年代決定並びに上伊那において単独築造された背景に関しては未だに議論の余地がある。

本論はこうした現状に対して、その築造年代の決定あるいは上伊那に単独で築造された背景を解き明かすことを目的としたものである。

具体的には墳丘形態や本墳の遺物とされる埴輪や須恵器を改めて検討し、本墳の年代決定を行うと共に、伊那谷における他の事例との比較を通じてその系譜を探っていくこととした。

まず墳丘形態を検討すると、本墳は前方部がある程度発達した古墳時代後期に類する墳丘形態を呈することが分かった。しかし伊那谷全体に目を向けると古墳時代中期末~後期にかけて後円部の発達が広くみられる事を再確認したものの、本墳の築造年代を決定づける要素を備えた類例は確認し得なかった。

また本墳出土の埴輪は胎土や焼成などにおいて共通性が認められ、川西編年第V期(6世紀代)に一括生産されたことを改めて確認した。個別の製作技法を確認してもいずれも古墳時代後期においてみられた特徴が認められ、関東地方においてその類例を確認した。

また本墳の須恵器はいずれも伝世品であり、本墳に伴うものであるか吟味が必要であった。観察の結果、まず本墳の須恵器とされたものの多くは猿投窯産の特徴を備えており、MT15~TK10型式期、TK43型式期、TK209型式期の3群に大別することができた。やはり本墳以外の事例が混入しているものと思われる。

以上の諸点を検討した結果、本墳の築造時期は少なくともMT15型式期以降、古墳時代中期~末葉にかけてのものとして推定される。

また本墳の埴輪は関東地方にその系譜を求められる可能性がある点、須恵器の多くが基本的に猿投窯産と思われる東海地方産須恵器である点から、伊那谷・関東・東海地方との交友関係の下で本墳が成立したことは疑いえないと結論づけた。

今後の展望としては関東地方との関係性を立証するための比較研究が不十分であった点を踏まえ、関東地方のいずれの地域に類例が認められるのか等を検討していきたい。

江戸時代の大名墓所に関する一考察

－時期・石高と規模の比較から－

工藤 海

江戸時代の大名墓所は大名の意思と信仰によって造営され、藩ごとに個性があり、墓所の施設は一樣ではないとされる。しかし大名墓所の研究は個々の大名墓所に関するものが多く、複数の大名墓所を研究対象として大名墓所の特徴を明らかにするといった研究は多くない。そこで本論では、大名墓所の上部施設の規模に注目し、大名墓所を造営するにあたり石高や時期による影響はあるのかについて考察を行った。

研究方法としては大名墓所の上部施設を「基壇」「墓域」「墓所」「廟域」の4つに分類し、それぞれの規模を大名ごとに石高、時期を比較した。

分析の結果、石高による比較では、石高が大きい大名の墓所は規模がおおむね大きくなることが分かった。しかし大名の分類でみていくと違いがあり、親藩大名や親藩大名の墓所では石高に関わらず墓所を造営する傾向がみられた。特に親藩大名では石高と規模が大まかには比例してみられるものの、比較的大規模な墓所が造営され、また仏教ではない宗教により墓所を造営されることが外様大名や譜代大名と比べ多くみられた。これは徳川將軍家に近い比較的自由に墓所を造営することができたということが考えられる。また時期による比較では、変化が不明瞭であり、時期が墓所の造営に影響があるとは確実には言えないことが分かった。大名家ごとに墓所の規模の変化を見ていくと大名家ごとにその変化の様相は異なっていたが、初代藩主や2代藩主の墓所の規模を踏襲し江戸時代を通して同規模の墓所を造営するもしくは、初代藩主や2代藩主の墓所の規模を最大に徐々にその規模を縮小し造営するという2つの傾向がみられた。これは江戸時代を通して初代藩主や2代藩主を藩祖、家祖として重要視していることを示していると考えられる。

以上のことから、大名墓所は石高や時期による影響だけでなく、初代藩主や2代藩主の墓所の規模、宗教、墓所の形式、墓所が造営される地、墓所の造営を行う大名の意思といった様々な要因から造営されていることが考えられる。

平成 24 年度 富山大学考古学研究室修論中間報告会・卒論発表会

日時：2013 年 3 月 17 日(日) 13 時半～

場所：富山大学人文学部 2 階 第 4 講義室

当日のスケジュールは次のとおりです（順番が入れ替わることもあります）。

聴講は無料で、申し込みは不要です。皆様ふるってご参加ください。

お問い合わせ等がありましたら 076 - 445 - 6195(富山大学考古学研究室)もしくは
tomidaikouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【修士論文中間報告】

- ①三好清超「飛驒の古代寺院における瓦製作技術の導入と展開 ―縦置き型一本作り軒丸瓦と竹状模骨瓦から―」

【卒業論文】

- ②大澤拓馬「縄文時代の貯蔵穴からみる食糧利用の一考察 ―北陸地域を対象に―」
- ③今井 翔「長野県上伊那郡箕輪町松島王墓古墳における一考察」

追い出しコンパのお知らせ

早春の候、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、富山大学考古学研究室では、3月17日(日)の修士論文中間報告会・卒業論文発表会の後に追い出しコンパを開催いたします。ご多忙中かとは思いますが、参加していただければ幸いです。

日時：3月17日(日)17時から

場所：一次会…和民 会費 4200円

二次会…とりあえず吾平 会費 3500円

※参加を希望される方は3月9日までに tomidaikouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。

※費用は出席者の人数によって多少前後することがありますので、ご了承ください。

一次会と二次会の場所については、下記の地図をご覧ください。

一次会 和民



二次会 とりあえず吾平



編集後記

寒さ暑さも彼岸までと申しますが、まだまだ寒い日が続いております。

3月に入り、そろそろ春の足音が聞こえてまいりました。春は先輩方とお別れをする季節、そして新しく2年生を研究室に迎える、うれしくも寂しい季節です。

卒業される先輩方は、富大考古通信に原稿を提供していただきありがとうございました。これから困難も多いかと思いますがしっかりと自らの道を歩んでいかれることをお祈りしております。

今年の春からは、2年生が6人入ってきます。新しい仲間を迎えて、研究室がますます楽しく、そして皆で協力して学ぶことができる場となるよう、一同頑張っております。

(岡山充味・小林史佳)

富大考古通信 第十四号

配信日 2012年3月5日

編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室

住所 930-8555 富山市五福 3190

TEL 076-445-6195

留守番アクセス 4000 BOX 番号 6195

HP <http://160.26.62.22/kouko/index.html>

メール tomidaikouko@yahoo.co.jp

※メールにつきましては、迷惑メールと区別するため、タイトルに必ず「富山大学考古学研究室」と入力してください。ご協力よろしくお願いたします。